The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『生命の水』におけるアーザードのダビール・アニース比較論
Author(s)	松村, 耕光
Citation	言語文化研究. 2013, 39, p. 117-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24708
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『生命の水』におけるアーザードのダビール・アニース比較論

松　村　耕　光

Āzād's Comparative Appraisal of Dabīr and Anīs in *Āb-e Ḥayāt* (The Water of Eternal Life)

MATSUMURA Takamitsu

Summary：In *Āb-e Ḥayāt* (*The Water of Eternal Life* 1880) Muḥammad Ḥusain Āzād (1830-1910) compares the poetical style of Dabīr (1803-1875) and Anīs (1803-1874), two representative masters of the Urdū *marthiyah* (elegy) of Lucknow. According to Āzād, in Dabīr's poetical style stress is laid on scholarship and rhetoric while in Anīs's poetical style emphasis is placed on limpidity. The reader expects him to oppose to the former style and support the latter, because in the introduction and introductory notes preceding each explanation of five periods of classical Urdū poetry, Āzād emphasizes the importance of limpidity in poetry. Contrary to the expectation, Āzād does not criticize Dabīr's poetical style, but he praises both poetical styles. We can discern two parts in *Āb-e Ḥayāt* ; one is full of critical spirits and the other, devoid of them.

キーワード：『生命の水』，ムハンマド・フサイン・アーザード，ウルドゥー文学

はじめに

近代ウルドゥー文芸批評の基礎を築いたムハンマド・フサイン・アーザード（Muḥammad Ḥusain Āzād 1830-1910）の主著『生命の水（*Āb-e Ḥayāt* 初版1880年，第2版1883年，第3版1887年）』では，ウルドゥー古典詩の歴史は五つの時期に分けられて論じられており[1)]，ウルドゥー古典詩の最終時期，第5期で扱われているのは，次の詩人たちである（括弧内に生没年[2)]と『生命の水』第2版で各詩人が扱われている頁数を記しておく[3)]）。

1）『生命の水』で行われているウルドゥー古典詩の時期区分については，拙稿「『生命の水』におけるウルドゥー古典詩の時期区分について」，『大阪大学世界言語研究センター論集』，第1号，2009年，を参照。

2）古典詩人の生没年は確定困難な場合が多い。ここに記した生没年にも不確かなものが含まれている。

3）本稿では，ラクナウーのUttar Pradesh Urdu Academyが1982年に出版した，『生命の水』第2版（1907年出版）の復刻版を底本とする。

ナースィフ（Nāsikh d. 1838 pp. 327-363）

ハリーク（Khalīq d. 1844 pp. 364-372 [4]）

アーティシュ（Ātish 1785-1847 pp. 372-387）

シャー・ナスィール（Shāh Naṣīr d. 1838 pp. 387-404）

モーミン（Mōmin 1800-1852 pp. 404-419）

ゾウク（Dhauq 1790-1854 pp. 420-481 [5]）

ガーリブ（Ghālib 1797-1869 pp. 481-515）

ダビール（Dabīr 1803-1875 pp. 515-519）

アニース（Anīs 1803-1874 pp. 519-526）

これらの詩人たちの中で，シャー・ナスィール，モーミン，ゾウク，ガーリブはデリー詩壇の詩人であり，残りはアワド（Awadh）太守領のラクナウー（Lakhnaū 英語表記はLucknow）詩壇の詩人たちである[6]。また，ハリーク，ダビール，アニースの3名は，北インドのウルドゥー詩の中心的詩型であったガザル（ghazal 定型抒情詩）の詩人ではなく，マルスィヤ（marthiyah）の詩人たちである。

マルスィヤは，本来，死者の死を悼む詩のことであるが，ウルドゥー詩では独自の発展を遂げ，680年にイスラームの預言者ムハンマドの従弟・娘婿アリーの子フサインがカルバラー（Karbalā）でウマイヤ朝の軍隊に殺害された事件――いわゆる「カルバラーの悲劇」――を中心的主題とした詩が，普通，マルスィヤと呼ばれている[7]。『生命の水』第5期の掉尾を飾っているダビールとアニースは，マルスィヤを完成した大詩人である[8]。

アーザードによれば，ダビールとアニースの詩風は非常に異なっていた。ダビールの項でアーザードは，両者の詩風の違いについて次のように述べている。

> 「ダビールとアニースの見事な詩業は，詩を解する者たちを二派に分けた。アニース派（Anīsiyē）とダビール派（Dabīriyē）である。… 言葉の明晰さ，言葉遣いの妙，言い回しの味わい深さ，構成の妙，形式の美しさ，言葉の時宜にかなった選択，表現方法，順序だった展開という点においてアニースに匹敵する者はいない。このような点を考慮したために

4） ハリークの項では，ハリークのライバル的存在であり，ダビールの詩の師匠であったザミール（Ẕamīr d. 1855）にも言及されている。ハリークは，マスナヴィー（mathnavī）詩型で書かれた，著名なウルドゥー長篇物語詩『叙述の魔術（Siḥr al-Bayān）』の作者ミール・ハサン（Mīr Ḥasan d. 1786）の息子であり，アニースの父親である。

5） ゾウクの項が他より長いのは，ゾウクがアーザードの詩の師匠であったためである。

6） アワド太守領は，1819年に藩王国となり，1856年に滅亡した。ラクナウーが首府となったのは，1775年。

7） マルスィヤは，通常，1連6行―押韻形式はaaaabb――の，ムサッダス（musaddas）詩型で詠まれる。この詩型でマルスィヤを詠む基礎を築いたのは，ソウダー（Saudā d. 1781）であるとされている。元々マルスィヤは，フサインの死を悼む集会マジュリス（majlis）で詩人によって朗唱される短い詩であったが，ザミールによって叙事詩のような内容の詩に変えられた。アワドの支配者はシーア派であったのでシーア派の文化が花開き，マルスィヤの隆盛がもたらされた。

8） ファッルヒーによれば，ダビールとアニースの項は第2版において追加された。初版においては，ナースィフの項にダビールへの言及が見られるだけのようである（Aslam Farrukhī, *Muḥammad Ḥusain Āzād*, vol. 2, Karachi, 1965, p. 313）。

彼は寡作であった。荘重な言葉遣いや多彩な主題――それらの中には随所にマルスィヤの真の目的である，悲しみを誘う叙述，胸を痛ませるようなほのめかし，悲劇的で悲壮な様式が見られる――，これらの点においてダビールは帝王である。」（pp. 517-518）

本稿においては，『生命の水』の序論や各章の序文を通じて，過剰な技巧を排し，平易で理解しやすい詩を書くことを主張するアーザードが[9]，詩風の異なる二大マルスィヤ詩人ダビールとアニースをどのように論じているのか，検討することにしたい。

ダビール・アニース比較論

ラクナウー詩壇を代表するマルスィヤ詩人ダビールとアニースは同世代の詩人であるが，ダビールの方が先に名を成していたようである[10]。『生命の水』では，アーザードはまずダビールを論じているが，ダビールの項では，先に引用したような詩風の違いの指摘が見られるだけで優劣は論じられていない[11]。

アニースの項では，アーザードはダビール，アニース両者の詩風の違いについて，「アニース派（Anīsī ummat）は，自分たちの詩句の創造者（sukhan-āfrīṅ アニースのこと）の言葉の明快さ，描写の美しさ，言い回しの妙を示して（ダビール派に）挑戦し，ダビール派（Dabīrī ummat）は，（ダビールの）言葉の壮麗さ，高い飛翔（buland-parwāzī 高度な想像性ということ），主題の新しさを示して対抗していた」（p. 521）と述べ，ダビール支持者とアニース支持者の論争という形で――実際にこのような論争があったのかどうか解らないが，アーザードの想像の産物であろうと思われる――両者の文学観の違いを明らかにしている[12]。興味深い論争であるので，詳しく両派の主張を追ってみることにしよう。

9）詳しくは，拙稿「『生命の水』序論に見られるアーザードのウルドゥー語・ウルドゥー詩改革論」，『大阪外国語大学論集』，第33号，2005年，を参照。

10）ダビール（Mirzā Salāmat ‘Alī Dabīr）はデリー生まれで，幼少時にラクナウーに移住した。長じてマルスィヤ詩人ザミールに師事し，頭角を現した。アニース（Mīr Babar ‘Alī Anīs）はファイザーバード生まれで，マルスィヤ詩人である父ハリークの後を継いでマルスィヤ詩人となった。
　1857年にアーザードはアニースに会っている。「私は（18）57年に彼（＝アニース）に会った。人からも聞いていたが，アニースは口数の少ない人であった。話すと，衣服に付けるにふさわしい真珠のような見事な言葉を発した。」（p. 525）「故ミール・アニースが詩を朗唱しているところも私は見たことがある。ほとんど手を動かすことも，首を動かすことも，目を動かすこともなく――動かしたときは効果的であった――，詩句だけで意味が十分に伝えられていた。」（p. 370）

11）「これらの点においてダビールは帝王である」と記したあと，アーザードは，「（ダビールには）根拠不確かな伝承や心を傷つける，不適当な内容の詩があるという（ダビール）反対派の批判は正しい」（p. 518）とダビール批判者の見解が正しいことを認めているが，すぐに次のようにダビールを擁護している。「人間というものは，一つのことに集中すると他のことはあまり考慮しなくなってしまうものである。ダビールは，何千人もの敵や味方の集まったマジュリスで詩を朗唱しなければならなかった。嘆き（をもたらす力），言葉遣いの妙，新しい内容が称賛された。究極の目的は，全員を泣かせ，全員の口に称賛の言葉を発せさせることであった。それを求める強い気持ちや新しいものを探し出そうとする気持ちが，ペンから何を生み出そうと驚くには及ばない。批判とはつまらない行為である。批判しようと思えば何でも批判できるのである。」（p. 518）

12）アニース支持派とダビール支持派が対立していたことは，サアーダット・ハーン・ナースィル（Sa‘ādat Khāṅ Nāṣir）の『見事な対立（*Khush-Ma‘arikah-e Zēbā* 1845/46年）』というタズキラ（tadhkirah 詩のアンソロジー。詩人の伝記的情報や詩の特徴なども簡単に記されている）などで確認できる。

論争は，次のように始められている。

「アニース派の者たちは言ったものであった――『諸君が自慢しているような事柄，それらは雄弁の法廷（darbār-e faṣāḥat 詩の世界のこと）では受け入れられなくなり，とっくの昔に排除されている。なぜならそれらは，大山鳴動鼠一匹（kōh kandan aur kāh bar-āwardan 山を穿って藁を見つけてくること）に他ならないからである。』」

「ダビール派の者たちはこう言ったものである――『諸君が難解なものと呼んでいるもの，それこそが知識の宝石である。それは修辞（balāghat）と呼ばれており，もし諸君の詩句の創造者が知識の力を持っているなら，山を裂き，この宝石を取り出すがよい。アニースの詩に何があるだろうか。単に言葉の出し入れがあるだけである。』」

「アニース派の者たちはこの反論を聞いて激昂し，こう述べたものであった――『我々の意味の創造者（ma‘nī-āfrīṅ アニースのこと）の作品に見られないような詩想が諸君の詩句の創造者（＝ダビール）にあるであろうか。諸君は何も解っていない。諸君が言葉の出し入れと呼んでいるものは，言葉の明快さ，優れた描写力という美点である。それはこの上ない平易さ（sahl-e mumtana‘）と呼ばれている。これは生まれつきの才能であり，本を読んだり，インキで紙を黒くしたりしても獲得することができないものである。』（pp. 521-522）

以上のように，アーザードは，知識を必要とする修辞――アニース派に言わせれば「難解な」修辞――を重視するダビール派と，そのような修辞は詩には不要なものであるとして排除し，言葉の明快さ，平易さを重視するアニース派というふうに両派を特徴づけ，さらに次のように両派の「論争」の模様を描写している。

「ダビール派の者たちは，アニース派の見解を聞いて，或るマルスィヤの冒頭部分，出陣の場面，戦場での自己称賛の場面――それらにはコーランやハディースからの引用がある――を朗唱し始めたものであった。」

「するとアニース派の者たちはこう述べたものであった――『それらを否定するような異教徒がここにいるであろうか。もうそのような朗唱はやめたまえ。これ以上の朗唱は不要である。話題を変えると議論の流れが途切れてしまう。諸君，華麗な言葉遣いだけでは何の役にも立たない。意味を示すことが肝要なのである。これについては話をしても話尽くすことはできないであろう。これは優れた詩人にしかなし得ないことだからである。長老たちからこの技芸の原則を直接口伝で学んだ達人たちだけが，その方法を知っているのである』」

「ダビール派の者たちは，詩句の創造者（＝ダビール）の優れた詩才，多様な題材，豊か

な語彙を示して応酬したものであった。彼らは――適切であるかどうかは別として――こう言い継いだものであった――『何と素晴らしい言い回しであろうか。（ダビールは）何と明快な話し言葉を使っていることであろうか。』」（p. 522）

この部分では，アーザードはアニース派が「華麗な言葉遣い」よりも意味を重視すること，これに対しダビール派は「多様な題材，豊かな語彙」を――意味よりも――重視することを示している。

両派の論争は，さらに次のように続く。

「（ダビール派の者たちは）さらにこう言ったものであった――『一晩で100連も書ける者がいようか。丸1年かけてムハッラム月に10篇，15篇のマルスィヤを書いたところで，それがどうしたと言うのか，しかも二人の弟の忠告を聞き容れ[13]，議論を重ねた挙句に。』」
「アニース派の者たちは言ったものである――『全くその通り。一晩で100連も詩を書けば，一貫性がなくなり，何か意味あることを表現しようとすると，さらにひどいことになってしまう。』こう言って彼らは，（ダビールの）慣用に反すると思われる句や欠陥がある直喩や不適当な隠喩を含む句を朗唱したものであった。」
「議論の応酬の挙句，ダビール派の者たちはこう言い放ったものである――『我々の詩句の創造者（＝ダビール）が得ているほどの人気を神は他の者にお与えになったであろうか。その詩が朗唱されたどのマジュリスでも，大きなどよめきが起きている。何と悲しみを誘い，悲しみを生みだす内容であることか。彼の言葉を見よ。信仰の命の水に浸っているのである。』」
「アニース派の者たちは言ったものである――『（ダビールに）朗唱などできるものか。彼の声を聞いてみよ。彼はマルスィヤの朗唱の仕方を知らないのである。』」（pp. 522-523）

過度の技巧使用を否定するアーザードの文学的立場からすれば，この論争はアニース派の勝利で終わらなければならない。しかしアーザードは，まるで評価を放棄したかのように，次のようにこの論争を終わらせている。

「どの言葉も論争者たちを黙らせることはできなかった。しかし，両派の者たちは声を涸らしてしまい，黙り込んでしまったものであった。すると正義が現れ，こう言うのであった――『両方とも素晴らしい』。また，こうも言うのであった――『あちらが太陽なら，こちらは月』。あるいは，『こちらが太陽なら，あちらは月』。」（p. 523）

13）アニースは3人兄弟の長男であった。

以上のようにアーザードは，平易な表現と意味を重視するアニース派と修辞，多様な題材，言葉を重視するダビール派の論争という形で，詩作の方向性を巡る重要な議論を紹介・提起しておきながら自分自身の見解を述べていない。アニースの項の最終部分でもアーザードは，「彼（＝アニース）の詩が比類ないのと同様，彼（＝アニース）の朗唱も無比であった。彼の声，彼の姿，彼の表情――要するに彼のすべてがこれ（＝マルスィヤ朗唱）に適していた。… ダビールの朗唱にこのような表現力がなかったことは事実である。しかし，神は彼に名声を博する幸運と人に感銘を与える力をお授けになった。たとえ別の人物が彼のマルスィヤを朗唱したとしても，見事に涙を誘うこと――まさにこれがこれの（＝マルスィヤ詩作の）最終目的である――ができたのである」（pp. 525-526）と記し，ダビールの朗唱に問題のあることは認めつつも，聞き手の涙を誘うことがマルスィヤの目的であり，ダビールのマルスィヤはこの目的を達成することのできる優れたマルスィヤであると高く評価しており，アニースの項においても，アニースとダビールの間に優劣はつけられていないのである[14)]。

終わりに

ダビールの項においても，アニースの項においても，両者の詩風の違いは論じられているが，優劣は論じられていない。このためにアーザードを批判する者もいるが[15)]，本来，『生命の水』は過去の偉大なウルドゥー詩人の生涯や詩業を記録するために書かれたものであるので[16)]，批

14）マルスィヤ詩人ハリークとザミールについても，次のようにアーザードは，両者の詩風の違いを指摘しているだけである。「表現方法において両巨匠の詩風は異なっていた。ミール・ザミールは学識，詩才の翼で非常に高く飛翔し，また地上に降りてきた。ミール・ハリークはマルスィヤの枠内から滅多に外に出なかった。新奇な主題を詩にしようとはほとんど考えていなかった。常に慣用的表現，味わい深い言葉に悲哀に満ちた詩想を組み合わせて意味を創造していた。これがこの鉄鏡（かがみ）が鉄鉱石であった時以来の、父祖伝来の美点であった。彼の詩は，素晴らしいという称賛の言葉よりも，涙やため息を求めていた。」（p. 367 ）

15）ムハンマド・ヤヒヤー・タンハーは，著書『詩人たちの鏡』で次のようにアーザードを批判している。「アーザードは，詩人のタズキラを書いているときに詩人の地位評価をどうして行わないのか，或る詩人の詩を他の詩人の詩と比較するときには比喩を用い，どうしてはっきりと自分の見解を明らかにしないのか，私には理解できない。たとえば，アニースとダビールに関して，アニース派はこう言い，ダビール派はこう反論する，と述べ，自分の見解の表明を避けるのは，どこまで正当なことなのであろうか。興味深いことに，自分の見解を述べたとしても，それはひどいもので，既に述べたことや読者の頭に両者に関してできあがった何らかの見解をこう言ってひっくり返してしまうのである――両者とも素晴らしいと言うべきである，と。時にはこちらを太陽，あちらを月と，時にはあちらを太陽，こちらを月と呼びたくなる，と。このようなものを見解と言えるであろうか。以上のことは，アーザードがこの二人の詩人について何の見解も持つことができないでいることを明らかに表わしているのである。」（Muḥammad Yaḥyā Tanhā, *Mir'at al-Shu'arā*, Lahore, vol. 1, n. d., p. 489）これに対し，ファルマーン・ファテプーリーは，次のように述べている。「アニースの言葉に関してアーザードは，『アニースの，いや，アニース一族の言葉は，ウルドゥー・エ・ムアッラー（Urdū-e Mu'allā デリーのウルドゥー語のこと）であったから，ラクナウーでは権威があった。… 集会で自作の詩を聞かせるとき，彼はいくつかの言い回しについて，これらは私の一族の言葉で，ラクナウーではこのような使い方はしない，と述べたものであった』と記しているが，これは明らかにアーザードの好みにはアニースの方が合っていたことを示している。しかし彼はアニース，ダビールのどちらをも理由もなしに批判していないし，一方をより優れていると示すために無理やり一方の美点，他方の欠点を挙げたりしていない。アーザードの批評に見られるこの均衡こそが，アニース，ダビールに関する彼の意見を重要なものとしており，また，それはアニース，ダビール研究のきわめて有益な始点となっているのである。」（Farmān Fatehpūrī, *Mīr Anīs: Ḥayāt aur Shā'irī*, Karachi, 1976, p. 227）言うまでもなく，両者の詩風を対比し，アニースの優越性を示したシブリー（Shiblī 1857-1914）の『アニース・ダビール比較論（*Muwāzanah-e Anīs-o-Dabīr* 1907年）』以降，ダビール擁護論も見られるものの，ウルドゥー文芸批評においてはアニースの方が高く評価されている。

16）アーザードは，詩の欠点も含めて詩人に関するあらゆる情報をまとめようとしたと序文で述べているが（pp. 3-4），実際には，ウルドゥー詩人に対する敬意が減少しつつあるという危機感のもと（pp. 2-3），詩人の偉大さを示すことに主眼を置き，欠点の露骨な批判は避けていたように思われる。参考資料を参照。

判的な言辞は極力抑えられたと考えられる[17]。『生命の水』は，批評精神が横溢し，近代詩創造のメッセージが随所に見られる序論，各章序文と，著名詩人を好意的に扱った本論の二重構造になっていると理解すべきなのではないかと思われる[18]。ダビール，アニースの項は，彼らの詩句が引用されておらず，また，項末に代表句を収録してもいないので，決して充実した項とは言えないが，『生命の水』本論の特徴をよく示した個所であると言えるであろう。

参考資料

序文においてアーザードは，『生命の水』の執筆動機について次のように記している。

「彼ら（＝偉大な詩人たち）の偉大さを証明するような事柄がこのように人の口にずっと委ねられるならば，数日のうちにそれはこの世から消えてしまうであろう。… 偉大な詩人たちの偉大さを示す作品は残っている。しかし，偉大な詩人たちのことは詳しく知られておらず，単に詩集が出回っているだけである。詩集だけでは，（詩人たちの偉大さを知らしめるという）目的は十分に達成されないし，現代に当時の様子を示すこともできない。それでは駄目なのである。… ソウダーやミールのような偉大な詩人に対して我々は尊敬の念を抱いているが，今日の人々にはそのような思いはない。彼らの作品を栄誉のローブとなって輝かせる，彼らの生涯や当時の出来事を知らないからである。… 優れた詩人たちは優れた技量を発揮し，永遠の名声を得る機会を得たのに，形だけの名声（いのち）すら得ていないのは悲しむべきことではないであろうか。しかもこの優れた詩人たちは，その努力によって我々の共通会話用語･書記言語（hamārī mulkī aur kitābī zabān ウルドゥー語のこと）の一語一語に大きな恩恵を与えた人たちなのである。優れた詩人たちの業績が知られることなく忘却されるのは，まことに嘆かわしいことである」（pp. 2-3）。

「新しい教育を受け，イギリスのランタンの光でその頭脳を輝かせている人たちはタズキラをこう批判している――詩人の生涯のことが解らない，詩人の性格や生活状況が解らない，詩の素晴らしい点や長所，短所が解らない，同時代人とその詩の間にどのような関係があったのか解らない，生年，没年すら解らない，と。彼らの批判は根拠のないものではないが，そのようなことは詩人の家族やその家の優れた詩人たちやその周辺の人たちならば大抵知っていることである。… かつての著作方法では，このような（詩人の生涯の）出来事を書物に書くことは重要であるとは思われていなかった。このような些細なことは噂話の類であると考えられて

17）ダビール，アニース同様，対照的な詩風を持つとされる詩人ナースィフとアーティシュの詩風を比較する場合でも，明確な批判的言辞は控えられている。拙稿「『生命の水』におけるアーザードのナースィフ・アーティシュ比較論」，『大阪大学世界言語研究センター論集』，第7号，2012年，を参照。

18）序論，各章序文でもアーザードは，詩人の名を挙げて厳しく批判するようなことは行っていない。

いて，友人たちの集まりで話の種にでもなれば良いと思われていた。… 当時の人々は，時代の頁がめくられ，旧家が没落し，その子孫が自分の家のことにすら無知になるとは，それらの（詩人の生涯の）出来事の中のどれかについて語ろうとすると，証拠が要求されるようになるとは思っていなかった。このように考えて私は優れた詩人たちについて知られていることや様々なタズキラに断片的に述べられていることをまとめるべきであると思った。可能な限り，優れた詩人の生涯が生き生きと表現され，不滅になるように書こうと思った」（pp. 3-4）。